

2022. 10. 2. 主日礼拝説教  
聖書：ルカによる福音書8章42b～48節  
『あなたの信仰があなたを救った』

「ヤイロの娘とイエスの服に触れる女」という小標題で2件の奇跡物語がサンドイッチ構造で描かれます。もともとは別個の伝承をマルコが5:21-43で統合し、ルカはさらにその物語群を「救い」という「いのちの課題」へと発展させてゆきます。

本日の箇所は、重篤状態のヤイロの娘の癒しが迫られる中で、そのような緊迫した状況を遮るように「イエスの服に触れる女性」が登場します。登場するというには余りにも控えめに、そっと後ろから服の房に触れたにすぎません。しかし、「急ぎ」のただ中でこの女性の小さな行為に応えられたのはイエスの側でした。

古代、命とは血液に宿ると考えられていました。ギリシヤ時代のヒポクラテス派によって、病とは体液の不均衡により生じるという学説から、治療の多くは悪い血を瀉血するのが通例となっていました。これは何と19世紀半ばまで続きます。

この女性についての短い紹介文(43)には誰からも直してもらえないことが強調されています。健康を得る途上でもはやすべてを失ってしまったということでしょう。血が止まらない病とは前述したようにいのちの減少です。そこには弱さ・恐れ・不安だけが語り出されてゆくかのようです。

わたしたちはもう来月にアドヴェントを控えます。そしてクリスマス礼拝を迎えようとしております。マタイが描き、ルカがその内容に再解釈を施した聖誕劇ですが、共通して提案されているのは弱さ・恐れ・不安なのです。マタイはヨセフとマリアを、ルカは不安なマリアがエリサベトを訪ねて共感を得て、不安の場がそのまま喜びの場へと転換される人生の一幕が述べられてゆきます。どちらも弱さ・恐れ・不安の現場から他者と出会って行くことにおいて変革されるのです。それでは出会った他者が何か大きな解決策を提供してくれたのかというところではないのです。

それは他者と出会う、言い換えれば他者の寄り添いを受け入れる余地を決して閉ざしてしまわなかったということなのです。

わたしたちは筋を通して納得してゆく論理性を表向きは有しています。けれども人生とは、眼前の事実には圧倒されて有無をいわず納得させられてゆくものでもあるのです。「なぜこんなことが」とか「どうしてわたしが」と嘆くのです。そこでは人の持つこざかしい計算や判断は息を潜め、ただ沈黙させられてゆきます。そして弱さ・恐れ・不安に囚われてゆくのが人生なのでしょう。しかし、考え方を変わると、こういった否定的な思いこそが、わけも分からず生きているわたしたちに実は人生を分からせようとするいのちの思いやりなのかとも思うのです。

この女性はイエスの服の房に触れたとき癒されたと確信しました(44)。イエスは彼女に眼差しを注ぎ「あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。」(48)と彼女を待つ彼女自身の新しい人生と未来に押し出されます。

弱さ・恐れ・不安の渦中にあっても、他者を受け入れること、信じることを拒否してしまわない姿へと変えられてゆく出来事が印象づけられてゆきます。ルカはこれこそが「信仰」だと宣言するのです。

癒しの奇跡はすっかり影を潜めます。奇跡の出来事とは超自然な事柄を指すものではありません。それは人の変革なのです。奇跡とはこのことを知らしめる単なる導入でしか過ぎないのです。